



メイヨークリニック：
Visiting Clinician Program に
参加してその2

同仁病院
桑江 紀子

Visiting Clinician Program とメイヨ一の医師たち

このプログラムは1週間から最長3ヶ月まで、各国の医師がメイヨ一の臨床に参加するものである。米国のライセンスを有しない場合、患者の直接の担当医にはなれないが、ベッドサイドでの診察、治療に対する討論等、参加でき、プログラムの内容に関しては、希望を聞き、アレンジしてくれる。私は透析室、病棟、移植部門を希望した。

外国人医師はメイヨー玄関の真向かいの<Kahler Grand Hotel>に月6万程度で滞在できる。メイヨ一の建物とは地下道でつながっており、自由に行き来できる。食費は自己負担であるが、ホテルの3階に<Student Room>なるものがあり、各国の医師、留学生、米国のインターンシップの学生等がそこで調理、食事をし、語らうことができる場所がある。100万くらい教育費をとられるかもしれない、と多少の出費は覚悟して渡米したが、航空券代、ホテルの滞在費、食費、多少の小遣い等あれば十分であった。参加している医師はそれぞれ時期は若干ずれるが、1ヶ月ないし3ヶ月で、オランダ、スペイン、中国、韓国等多彩である。1899年、the American Journal of the Medical Sciences のDr. Beck をメイヨー兄弟が招いて、自分の手術をオープンにして以来、世界中から Visiting Surgeon がやってきた。Visiting Clinician Program もこの伝統に基づいており、治療の場で、外部の者の意見でも取り入れる柔軟な姿勢が見られる。

病棟、外来で医師たちは、回診での話の長い患者に40分近くも耳を傾け、必要とあらば、患者の掛け布団の乱れを直してやり、患者の同意が得られないときも高飛車に発言することもある。

く、大変丁寧で礼儀正しかった。<あの患者のはなし長いね>という、ディレクターのDr. Norby は<Yeah, always>と苦笑いし、<アメリカ人はindependentで自己主張が強いからね>と答える。メイヨ一の医師として採用されるには大変競争率が高く、(放射線科教授の日本人Dr. K もcompetitiveと表現した) 実力は言うまでもなく、患者へのサービス精神が不可欠で、ここで研修を開始するときから、その態度を評価される。たとえば、どんなに優秀でも、患者サービスにおいてメイヨ一の基本理念と一致しなければ、採用されない。また、このサービスを好まない医師は他の病院を選ぶ、とのことであった。

コンサルト形式は徹底しており、1人の患者について、多数の各科の医師たちが関わる。対応は迅速である。研修に関しては、救急部門以外、初期研修の3年を修了し、フェローになると、コールはあるが、当直の義務はない。病院滞在時間は30時間を越えてはならず、反すれば、フェロー、研修医はViolationを研修委員会へ提出できる権利を有する。卒後16年目のDirector Dr. Norby は<今は甘い、私たちのときは大変だったのよ>と語った。患者、看護師同様、研修医、フェロー、スタッフもアメリカ国内のみならず、パレスチナ、イラン、ウクライナ、中国、エチオピア、香港、パキスタン、ヨーロッパ等国际色豊かである。

お昼のカンファレンスは、各科及び全科院内のあちこちで開かれており、トピックはインフルエンザからICUでいつ延命をやめるか、等、幅広い。講師は世界各国の教授クラスの人たちで、議論は白熱して、時間延長もしばしば見られた。

業務はすべて、コンピュータ化されており、機能は当県で使用してされているレベルと変わらない、とみた。

医師の待遇に関して尋ねた。卒後15年目のアミロイドーシスの専門家Dr. Lによると、勤務時間は通常8時から6時くらいまで。また週末は原則的に休み(コールがあればその限りではない)、年休は12日、給料は2,000万から3,000万円、腎臓医は若干高め、外科になると、この2倍くらい、メイヨー以外で就職すればもっと高い。訴訟に関してはメイヨーに勤務して

いる医師は生涯に1回あるか、なきか、という。給与は安い、(メイヨーの医師は腕はいいのに給与は安いらしいよと患者もはなしていた)働きやすく、患者との信頼関係が良好というのがメイヨーにとどまる理由であるらしい。

さらに看護師、受付等のコメディカルも25年、30年等長年勤務する人が多く、ときおり、メイヨーの院内雑誌に写真と名前入りで紹介される。

ロチェスター

6月フェロシップ終了後、フェロー6人のうち、2人だけ残り、あとはニューヨーク、ボストン、中西部へ散っていく。ミネソタは田舎で寒くて、ニューヨークが恋しくてね、とポーランド出身のフェローの妻が言う。滞在した2か月間、気温は8度から15度程度、さらに天気は一日のうちでも激変した。昨年冬はマイナス30度まで下がったと聞いた。毎日、<今日こそはいい天気になりますかね>と挨拶代わりに尋ねるほど、初夏だというのに日本の2月、3月に相当する気温であった。気候のきびしいミネソタであるが、<ミネソタナイス>といわれるように、人々は親切で、古きよきアメリカ人のそれである。スカンジナビア、ドイツ系の祖先が80%を占め、<ヤンキー>なアメリカ人とは違っている。英語もなまりがほとんどなく、標準的、美しい英語であり、聞き取りやすい。犯罪はほとんどなく、93年から97年のBest Place to live in Americaで住みたいところ、全米1位であった。2009年のNBCのquality of lifeの面から依然として2位を維持している(平均年収\$51,316, 平均住宅価格\$114,700)。

メイヨーメディカルスクール卒業式

5月の16日、土曜日、朝、Farmer's Marketにむかう途中、Civic Centerのガウンをきた集団をみかける。メイヨーメディカルスクールの卒業式らしい。急遽、生徒の父兄とともに卒業式に参加した。ガウンを着た晴れ晴れした面持ちの若者たちに、許可をえて、写真を撮った。誰もみな、喜びに溢れる顔、顔。

卒業生代表は腎臓内科希望で、挨拶の最後はラップで締めくくった。会場は笑いで包まれ、司会の教授は<メイヨーの卒業生はなんと cre-

ativeなのでしょう>と発言、父兄からの盛大な拍手を得ていた。

The Mayo Way

2009年6月29日号の週刊Timesはメイヨーについて以下のように論じた。メイヨーの成功の秘訣は 1) 普通のケアに価値を置いていること。2) コンピューター化の徹底。無駄をはぶいている。3) 予防と健康に重点を置いている。4) 他の医療機関との統合、調整を行い、無駄な検査を省いている。5) チームによる医療をおこなっている。6) Evidence-Based Medicineを重視する：電子記録を用いて、効果的な研究を行い、outcomeを把握している。そうすることで、集中治療や、不必要な輸血を避けることができる。7) 市場価値に応じて、医師の給与を固定化し、患者のニーズに集中させる：賠償、訴訟の心配する必要がない。一人、一人の患者に時間を掛けることができる。以上の項目を挙げている。

これまでの実績に関して言及すると、メイヨーは2007年に医療費を払えない患者に対し、5,560万ドルに相当する医療を提供、さらにMedicadeなどの低所得者医療扶助プログラムの未支払い分が合計で1億2,710万ドル。1億8,200万ドル以上分以上の医療を、治療を必要とする患者に無償で直接提供している。2004年の収益は56億ドル。

依然として、ミネソタ州における非営利団体で第2位を占め、<世界のメイヨー>に君臨している。(あるヨルダン人はこのシステムを学んで、自国の医療に取り入れたいとシリア、イタリアの循環器の医師らと食事した際、熱く語っていた)。



メイヨーの医師達。中央が Director Dr.Norby.

随筆



6回目の寅年 あれやこれや その1

沖縄第一病院
名渡山 愛雄

とうとうやって来たのである。というと、オーバーな表現であるが昭和20年以前の大正から昭和1桁生まれの先生方には“赤紙”いわゆる戦争に駆り出される召集令状を思い浮かべるのではないだろうか。

民主党の鳩山政権が自民党麻生政権に変わり医療界は、はたまた庶民生活は如何様になるのか懸念した矢先の昨年9月上旬封書が届いた。それも相次いで2通である。1通は御上からのもので、(自分は若いつもりでも)70歳になったので今年の誕生日までに高齢者講習等通知書を持って車両運転講習を受けるべしとの御達し。もう1通は県医師会から随筆寄稿の依頼で、12年前の還暦の時に同様の依頼をキャンセルした前歴があり、その汚名?を返上すべく重い腰を上げることに相なり筆をとることにした。

それ以来食事の時連れ合いが「最近食が細いけど何かあったの」と言う。それで経緯を話し「県医師会の先生方は名文家が多いけれど僕は書くのがどうも苦手なんだ」と返事する。自分の不安をよそに妻は「上手く書こうとするから駄目なの、自分の周辺のことや趣味のことを書けば」でやっと肩の荷が下りる。

父愛篤は大正元年の生まれであるから生きていけば俳優の森繁久弥と同じ年になる。沖縄県立第二中学校(現那覇高校)を昭和5年に卒業し在学時代、野球選手として野球にのめり込み過ぎて体を壊し母との結婚生活1年目で他界。父の顔は写真でしか知らない。父の遺品は蓄音機と78回転のレコードそれに二中時代の卒業アルバムであった。音楽が好きだったようでヴェルディのオペラ「椿姫」の中の「乾杯の歌」などのレコードをよく覚えている。今は卒業ア

ルバムしか残っていないが、その中には父は義父(故照屋義彰)に英語を習ったようだ。私は以後母と祖父母に育てられた。

母千江は大正3年、第1次世界大戦(1914)の年、寅年生れである。寅年生れの女性は千人針を縫わされ、それを身に付けた、兵隊は敵の弾に中たらないよう武運長久の縁起をかついだ訳である。母は時には防火訓練や銃後の竹槍の訓練に出ていた。母は戦後「轟く^{トドロ}槌音^{ツチオト}飛び来る弾丸…から始まって…杉野は何処^{イスコ}杉野は居ずや」で歌われる日露戦争時の文部省唱歌「廣瀬中佐」をよく聴かせてくれた。沖縄サミットの年(2000年)に他界。

2004年には、日露戦争100周年沖縄大学又吉盛清学級学外学習会「中国東北部(旧満州)の旅」に参加、旅順など激戦地の跡を辿った。日露戦争は良きにつけ、悪しきにつけ先の戦争に進んでしまったことを実感した。

2、3歳の頃母の背中におぶさって見た映画があった。昭和15年の作品、宮沢賢治の童話「風の又三郎」である。風が吹くと

どっどど どどうど どどうど どどう
青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりん(りんご)も吹きとばせ

どっどど どどうど どどうど どどう

という風の歌が子供心に何か迫って来て恐ろしいシーンであり70歳を過ぎた今でも私の網膜や内耳の迷路に強烈に閉じ込められている。

昭和19年8月学童疎開が始まり、母と祖母と3名で国民学校1年生として台湾に疎開した。台中市の当時の新富国民学校に転校。教室にはほとんど内地から来た児童で占められ、垢抜けしない沖縄の子供はいじめの対象となった。私もその一人であり、よく泣かせられて帰ったものである。幸いに担任の先生が沖縄出身の川平という女の先生で何かと自分の悲しみを受け止めて貰った憶えがある。また、台中市で母と人力車に乗っていた時、霧島昇の“誰か故郷を思わざる”を聴いた。

戦争が激しくなり台中の東成という田舎に

移る。そこには大きな川や田圃があり川エビ、どじょうやナマズを採ったり、トロッコ（線路の上を走る工事車）に乗って遊んだ。

1 回目の寅年（昭和 25 年）

父方の親戚に 8 名兄弟姉妹の末っ子で丑年であるが私とは同学年の K がいる。K ちゃんと呼んで遊んでいたが大人から、彼は叔父さんに当たるのだよと云われ、子供心に不思議であった。その彼から映画に誘われた。この映画はスゴイそうだと云う。どんなに凄いのか？映画のタイトルは「暁の脱走」（池部良、山口淑子主演）で、彼が云うには“キスイズ”が見られるという。イズとは宮古島の方言では魚（イユ）である。彼の家は田舎の小さな新聞社であるが映画が上映されると、内容は伝わっていたが、私のような一人っ子で奥手の子には理解出来なかった。戦争映画に何でキスイズ（魚のキス）が出てくるのか皆目想像できなかつた。それが kiss であることをその時初めて教わった。とにかく当時はテレビもなく情報が極めて少ない時代であった。今考えると反戦映画であり最後の小沢英太郎の副官が主役の二人を機関銃で撃つシーンは子供ながらに印象的であった。

後年、東京の三井記念病院に勤務していたとき、めまい、前庭疾患の指導をして下さった当時文部省（現文部科学省）近くにあった虎ノ門病院耳鼻咽喉科の小松崎篤先生（現東

京医科歯科大学名誉教授）から、「沖縄へ帰ったら耳鼻咽喉科医として脳腫瘍になる前の聴神経腫瘍を見付けなさい」といわれた。先生は沖縄で手術をして翌日には魚釣りを楽しみたいようであったが。

昭和 55 年那覇市立病院に赴任し、幸いにも約束通り 3 例を見付けることが出来た。1 例は東京で、他の 2 例を沖縄で先生に手術して頂いた。当時那覇市立病院には脳神経外科は開設されておらず、やはり虎ノ門病院時代懇意にしていた大門勝先生が活躍していた沖縄県立中部病院脳神経外科で共同手術となり、予定通り翌日は大門先生、同病院内科の豊永一隆先生（現嶺井第一病院）を交えて魚釣りを楽しんだ。小松崎先生はキス釣りを得意とされ、ほぼ全国を廻っており、私も沖縄のホシギスの投げ釣りを 2 回体験させてもらって楽しかった。

最近では講演の度に沖縄の自然（日の出や夕日それに海など）にひかれて撮影するのを楽しみにして年に一度は沖縄を含む全国の風景写真のカレンダーを作っておられる。灯台下暗しのわれわれに沖縄の自然がいかに破壊されているか、泡瀬干潟や大浦湾の問題などを考えさせられる。

つづく

（続きは、会報 3 月号へ掲載いたします。）

原稿募集！

随筆のコーナー（2,500字以内）

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。

随筆



古稀のドゥル（泥） ムターン（遊び）その1

宮城小児科医院
宮城 英雅

平成21年、お屠蘇気分もそろそろ抜けた頃、僕は壺屋のヤチムン通りを足早に歩いていた。狭い路地に入り込むと蔦で覆われた石垣が両側から迫り、圧迫感を覚える。裸電球の街燈が寂しく辺りを照らし、垣間見える門や屋敷にはシーサーだの壺だのが置かれていた。この辺は山里のような雰囲気醸し出している。それが僕に快く伝わってくると同時にこれから陶芸に挑戦する気持ちをいやがうえにも揚らせた。

頃は10月、朝晩めっきり涼しくなり、吹く風はからっと肌に心地よい。30分の徒歩通勤後、職場で使うシャワーの水もかなり冷たく、短い秋も影を潜め、冬は直ぐ傍まで来ていた。

ビールのジョッキがとても冷たいので敬遠され、日本酒のぬる爛或いは泡盛のお湯割りが恋しくなる。そこで2合の酒が入る大きさで、グリップがついて注ぎ口のある容器即ち小さな水差しで、爛をつけたたりお湯割りの湯を入れて楽しんでみたくなり、そのような代物を探し始めたのだが、帯に短しで気に入った物は見つからなかった。

そんな折り、「ヤチムン通り祭り」があって、コース（古酒）を飲む為のとても小さなカラカラー（急須）と盃を買った。帰って早速洗っていると注ぎ口から水が出ない。詰まっているのかと爪楊枝で突いてみると抵抗があって貫通しない。注ぎ口から息を吹き込んでも空気が通り抜けない。頭に血が上った。カラカラーの中をまさぐってみたが注ぎ口に通じる孔らしきものも無い。何度か試してみたが一滴の水も出ないのである。これは正しく考えられない程の欠陥品だ。そう鑑定した途端、「オーッ、これは価

値ある稀観品だ、珍品だ」と小躍りした。きっと注ぎ口を取り付ける前にカラカラーの壁に孔を開け忘れたのであろう。

後日店に持って行くと知己の女主人が呆れるやら恐縮するやら謝るやら。強引に頼んで珍品も頂いた。今では合格品と共に欠陥品も飾り棚に鎮座している。客に珍品を使って一興にする事を考えると思わず知らずほくそ笑みがこぼれるのであった。

その品物と一緒に陶芸教室のチラシが添えられていたので、自分のイメージしている器を作ってみようかと未知なる体験に挑戦する気持ちで、むっくりと頭を持ち上げてきた。これが陶芸教室に通う動機で、今こうしてヤチムン通りを急いでいる。

狭い階段を数歩上ると身の丈1メートル位の大きなシーサーが迎えてくれた。木造瓦葺きの建物の中は使用中の陶器、製作途中の物、作業台が4台、ろくろが6台、そして天井の梁を利用した板の上には乾燥中の作品が無数に並べられていた。

講師は若い女の子が2人、男性が1人。生徒は15人の定員でその内殿方が5人、いずれも50代以上、昼間は暇を持って余しゴルフ三昧、夜は居酒屋談議に明け暮れているようだ。初日にも拘わらず、作業をしながら関西弁や関東弁やウチナー口が入り乱れて飛び交い、昼間のゴルフの事や、酒盛りの時の事が蒸し返されているところをみると、前回のコースから引き続き受講しているらしく、親しく付き合っている様子が窺える。

デモンストラクションに当主がろくろを回した。説明しながら指先は優雅に流れるように動く。その度に手元の土が円筒形になり潰されて小さくなったかと思うとあれよあれよと言う間に変形し、底の辺りに糸を当てたかと思うと、ろくろから切り離されて壺が現れた。マジックを観ているようでわくわくする。

オリエンテーションが終わると早速ろくろに取り組んだ。土はろくろの中心に置かないと回

転した時複雑な形の軌跡を描くので、成型が出来ないし第一目が回る。電動式なので自動車のアクセル・ペダルの要領で回転のスピードを調整するのだが、初めてなのでどれくらいのスピードが良いのか見当がつかない。そこは先生が助言してくれる。

両手で土の外側を圧迫すると細くなり、背丈が伸びる。それを上から押さえ付けるとつぶれる。又細く長くする。これを繰り返して中の気泡を除くのだと言う。称して土殺し。

てっぺんに2本の親指を突っ込み押し込んで行くと筒状になった。程よいくらいに内空を広げ壁の上部に指を当てて広げると何とコップの形が出来たではないか。とても面白い。

時々可愛い先生の声が飛んでくる。「手を水で湿して。」「回転のスピードを上げて。」「土から指を放す時は時間をかけてゆっくり。」と手元が狂い一瞬にして想像も出来ないようなくやくにゃした塊に変形してしまった。

コップの底に水が溜まってくるのでその度にスポンジで吸水し仕切りへらで形を整える。仕切りへらは先端の平たい部分は一側は直角で他方は湾曲になっている。縁は直接口に触れるところだから滑らかにしなければならない。その為セーム革に水をたっぷり含ませてそーっと押さえるのだが上手く行かない。すると可愛い先生が手を取って教えてくれた。

「ウォーッ、」指と指が重なっている。感動。不純。不謹慎。

30年も前の事だが開業したての頃、僕はヤマハのエレクトーン教室に通っていた。若い女の先生で生徒も若い女性ばかりであった。その楽しい雰囲気を楽しんで友人達に自慢気に話したら、その2人も初級クラスに申し込んだ。

ところがレッスンは始まるまでの間、彼らは

ビールを飲むのが常であったので、真っ赤な顔に指先は酔っ払って吐く息は臭かった筈だ。こいつらの動機が不純でありましたからして、連中は長続きしなかった。中退したと嘯いていたが退学させられたと今でも思っている。

そう言えば当主も二日酔いでろくろを回すと目まいがして吐き気をもよおすものだと言っていた。

作陶の工程で菊練りという土を捏ねる作業がある。平たく円形に潰して行くがその跡が襲になりあたかも菊の花のようになる。我々の物は決してそのようには仕上がらない。ナイフで切って断面を見るとチョコレートのように均一で砂粒も混ざっていない。然し気泡や空洞がある。この作業は体重を乗せてするのがコツだがかなり重労働である。腱鞘炎も起こしかねない。店舗のデザインと設計を生業としているT氏がぼやいた。

「こんな事ばかりをされていては生きていくうちに間に合わない。」

「何が」

「自分が入るジーシガーミ（厨子瓶）さ」



つづく

(続きは、会報3月号へ掲載いたします。)

随筆



シドニーマラソンへ

牧港中央病院
洲鎌 盛一

9月17日朝はやく、那覇空港を関西空港へ向けて出発。関西空港を昼に出国して香港経由で次の日の朝シドニー到着。日本との時差は一時間。到着日と次の日は自由行動。シドニーマラソンは、スタート地点からハーバーブリッジを渡り、シドニー市内から郊外に出て、折り返し市内に戻りそこからアンザック橋を渡り、また折り返して市内に入りゴールはシドニー湾のオペラハウスとなる。制限時間は5時間30分。なぜこんな遠い遠いシドニーまで走りに来てしまったんだろうという思いと、ついに海外でのマラソンにチャレンジできたとの思いがしだいに湧いて何となく気持ちが高ぶってきた。

年に一回の42.195Kmの那覇マラソンは10年以上完走してきた。ただ年々衰えが来て、最初は4時間前半のタイムが除序に落ちてきて去年は5時間の後半のタイムになってきた。きっかけは健康のためにと始めたジョギングが止められなくなり、マラソンへのチャレンジとなった。練習で5km走るのにもかなり苦しくこれはかなりの、冒険、チャレンジだと感じた。30代の後半でまだ若さがあったので、練習すれば何とかかなと思いつつ、こつこつと始めた。はじめてのマラソンは未知の世界で、20km地点通過のときは余裕があり楽勝と思ったがそう甘くはなかった。呼吸は苦しくなかったが、30km地点から急に足が重くなり、棒のようになり、足を上げることがこんなにキツイ事なのかと思った。自分の足でないような感じもした。ゴールは遥かかなたにおもえて、5分間走るのが一時間にも感じた。やっとの思いで、何とかゴールしたときは一つの仕事をやり遂げたような達成感と充実感があり、冷たいオリオン

ビールがなんとも言えないくらい美味しかった。走り終えた後のこの冷えたビールの味が堪らなくて続けているかもしれない。痛む足の筋肉の硬さももほぐれてくるようだ。

シドニーマラソン前日に世界遺産ブルーマウンテンズへ観光にいった。シドニーからバスで1時間半の広大な森林地帯。1,000m級のなだらかな山並みで、沖縄からきた私には、表現する言葉が見つからないくらい広大すぎた。何種類ものユーカリの木々に覆われた溪谷、奇岩、滝などがあり、ロープウェイに乗ったり、ブッシュウォーキングなどかなり楽しむことができた。ユーカリの葉から蒸発する油分が太陽の光に反射して遠くから見ると山が青く染まって見えるところからブルーマウンテンズと呼ばれているそうだ。剥き出しの溪谷には、砂土に石炭がサンドイッチ状になった地層があり遙か昔、昔のオーストラリア大陸の成り立ちの証拠がみられた。木々が生い茂り、いつの日か海の底となり砂が堆積し、また地殻変動で大地となりその繰り返しだったという。目の前の石炭が遙か昔々の植物のなごりだとの説明を聞くと、気の遠くなるような時のながれを思ったりした。木の祖先である、世界的に希少なウオレマイ松が発見されたことなどから2000年に世界遺産に登録されたと聞いた。とにかくユーカリの樹木に覆われた広大な山々には言葉を失った。今まで仕事の都合とか、まとまった休みを取ることに罪悪感を感じるような雰囲気だった気がする。あるいは自分自身の弱い性格の問題だったのかもしれない。まとめて7日間の休みを取ることが難しい雰囲気だった。これまで自分がつまらない生活をおくってきたのかなあ?と思ったりした。この広大な大陸にきて、頭の中の風通しが良くなり、広く感じ軽くなったような気がした。

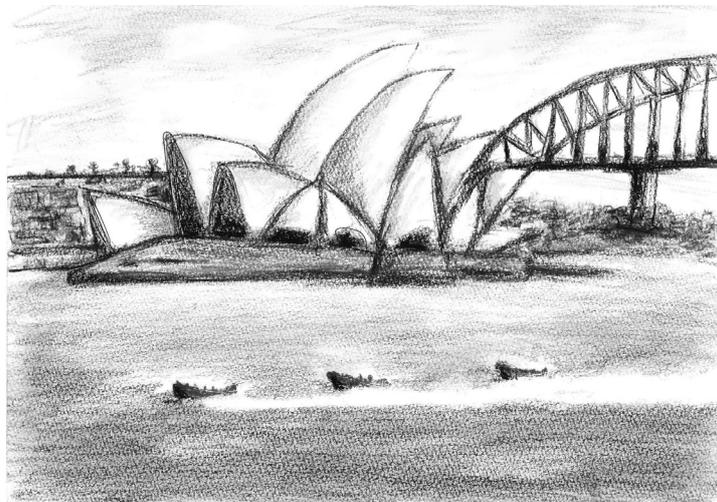
シドニー市には日本のように自動販売機があちこちに置いてない。のどが渇いてお茶を飲みたかったり、冷たいビールを飲みたいときは近くのバーに入るか、売っている店に入るしかない。市内は、捨てられた空き缶などなく、かな

りきれいだった。繁華街を歩く女性たちの格好も日本とは大分違っていた。ラフな短パンジーにビーチサンダルに近い履物で、こっちは肌寒いのに、彼女らは肩剥き出しの上着で、なんともおおらかでたくましさを感じた。シドニー市は岩でできた大地だという。約200年前イギリスから移住してきた人々の開拓時代の面影を残すロックスという町がある。砂岩を削った当時の道や、岩壁での建造物が見られる。保存されて現在の建物とよく共存されている。土は少なく貴重で、土を保護する法律までであると聞いた。土剥き出しの庭はなく必ず芝生などを植え、大きな木の根元は木屑が敷かれ、雨などで土が流されないように保護されているという。シドニー湾は海に向かって左側に突き出たところにハーバーブリッジ、右側が世界遺産のオペラハウス、港はサーキュラーキーと呼ばれ6か所のキャプテンクッククルーズ乗下船場がある。かなり賑やかで、大道芸人、また湾を取り囲むように沢山のレストランがあり、湾の風景を眺めながら食事やビール、ワインを楽しむことができる。沖縄の泡盛が一番いいと思っていたが、カキ料理、オーギービーフ、地元ビールとワインの味は格別で、なんとも言えなかつ

た。お酒は嫌いなほうでないので、もっと飲みたかったが、あすのマラソンのことを思うと早めにきりあげることにした。初めてのシドニー一人旅で、ホテルからは何となく緊張して外出したが、帰りはほろ酔いかげんで、ホテルへ帰るとぐっすり寝る事ができた。あす朝は早起きしてマラソンの日である。忘れないように、目覚ましのアラームはちゃんとam5時にセットした。が、気持ちの高ぶりか、翌日は、やはりアラームなしで目が覚めてしまった。

さてシドニーマラソンの結果である。4時間40分台で完走できた。シドニーオリンピックのマラソン一位の高橋尚子さんがスターターとして招待されていて、伴走もしてくれた。10km地点で後ろから“ガンバッテ、ガンバッテ”と走ってくる女性の声に振り向いたら彼女だった。オーラのあるスマイルでハイファイブのタッチもしてくれて、思わず元気いっぱいになってしまった。遠い、遠いシドニーまで、マラソンを走りにきて良かったとおもった。

シドニーから香港行きの飛行機の中かで、さて次の新しいチャレンジは何にしようかな？と考えたりした。



ESD 市民公開講座・公開講演会のご案内

『タイ発！地域医療再生の処方箋 —地域づくりから始めた医師夫妻24年の歩み—』

「26ショック」から約10年、生活習慣の改善は少しずつですが改善しつつあります。多くの方がウォーキングやジョギングを楽しむようになり、食育への取り組みも広がり始めました。しかし、健診の正常者の数は10%台にとどまり、外来は肥満、糖尿病、高血圧、虚血性疾患、認知症の患者でいっぱいです。

国民皆保険を施行しているタイのUbonrat病院も、24年前は患者であふれていました。当時、卒後4年目のDrs. Apisit・Tantip Thamrongwarangoon夫妻は、質の高い医療を提供すれば住民は健康でいられると、自信を持って医療過疎地の診療所に赴任しました。しかし患者は増える一方で、あまりの数の多さに一人一人の診療に十分に時間を割くこともできず、5年目にはすっかり疲弊してしまいました。そこで患者があふれている理由を分析したところ、外来患者は次の4群からなることがわかりました。

- ① 治療でよくなったが未治療では死亡していた群：23%
- ② 治療したことで死亡した（治療されなければよくなっていた）群 <1%
- ③ 治療してもしなくてもよくなったであろう群：76%
- ④ 治療の有無にかかわらず死亡した群：<1%

そこで、Dr. ApisitとDr. Tantipは①群と②群を減らす活動を開始しました。地域のヘルス・センターにいるメディカル・アシスタントの資格を持つ医療従事者を再教育し、ある程度までの健康問題に対応できるようにしました。住民には、庭で薬草を育てることや、自分たちでタイ式マッサージを行うようにすすめたそうです。すると多くの住民の体調がよくなり、次第に病院を受診する患者が減りました。

ご夫妻はさらに、貧しい生活が健康に影響していることに心をとめ、村人とともに豊かな村の未来図を絵に描き、実現に向けて取り組みました。

- ① 水を確保する（10月以降乾季が半年続くため）：各自の庭に井戸を掘る
- ② 換金作物から自給自足農業への転換（タイ国王が提唱する「足るを知る生活」の導入）。短期的には、たくさんの種類の作物を少しずつ栽培するintegrated farmを推奨する。
- ③ 中期的には、大きな家畜を飼う（牛を1万バーツで飼うと、1年ごとに4,000バーツずつ高くなる、数年育てて売れば牛乳を得ることができ、銀行に預けるよりも高い利子が得られる）、水牛を飼って労働力として使う
- ④ 裏庭に木を植える。木の苗は1バーツで買えるが、20年も経てば家を建てられるほど大きくなり、「年金」となる。
- ⑤ 仲間づくり：共通のゴールを目指して、助け合えるような仲間づくりを行い、モチベーションを上げる。村づくりにはマルチ・セクターで取り組む。
- ⑥ 知識を分かち合う：生活に必要な知識・地域の知恵を共有する

この取り組みが村全体に広がり、いまでは健康的で豊かな村に変貌しました。その取り組みはBBCでも取り上げられ、タイでは、お二人のTVドラマも作られたほど注目を浴びています。そのほかにも、この医師夫妻はUbonrat病院で次々と新しい試みを進めてこられました。地域ごとに糖尿病外来の日を決め、巡回バスで迎えに行き、採血後に朝食を提供し、栄養教育や体操教室までプログラムを提供して外来受診の効果を高めたり、それまでにはなかった訪問看護を開始するなど、地域と一体となった活動を展開されています。

このたび、Apisit・Tantip先生ご夫妻をお招きし、持続可能な地域づくりから地域医療を再生させ

お知らせ

たこれまでの歩みについてお話しいただくことになりました。つきましては、下記の日程で講演会を開催いたします。沖縄の医療の問題への新たな取り組みの契機になると確信しています。多くの先生方の参加をお待ちしています。

なお、この講演会は「平成21年度文部科学省国際協力イニシアティブ事業：持続発展教育（ESD）国際協力モデル形成」の助成を受けて行われます。

<市民公開講座>

- (1) 日 時：平成22年3月2日（火）19：00～20：30
- (2) 場 所：今帰仁村コミュニティーセンター
- (3) 講 師：Dr. Thamrongwarangoon 夫妻
（タイ Ubonrat 病院）
- (4) テーマ：タイ発！地域医療再生の処方箋
ー地域づくりから始めた医師夫妻24年の歩みー
- (5) 対 象：保健医療関係者及び関心のある方はどなたでも
- (6) 参加費：無料
- (7) 主 催：今帰仁診療所、
琉球大学医学部附属病院地域医療部
- (8) 共 催：三重大学地域医療学講座
- (9) 後 援：今帰仁村、沖縄県北部地区医師会、
NPO 法人今帰仁ふるさとネットワーク
- (10) お問い合わせ：今帰仁診療所 TEL:0980-56-3581

<公開講演会>

- (1) 日 時：平成22年3月3日（水）19：00～20：30
- (2) 場 所：沖縄県医師会館2階 会議室1
- (3) 講 師：Dr. Thamrongwarangoon 夫妻
（タイ Ubonrat 病院）
- (4) テーマ：タイ発！地域医療再生の処方箋
ー地域づくりから始めた医師夫妻24年の歩みー
- (5) 対 象：保健医療関係者及び関心のある方はどなたでも
- (6) 参加費：無料
- (7) 主 催：琉球大学医学部附属病院地域医療部、
今帰仁診療所
- (8) 共 催：三重大学地域医療学講座
- (9) 後 援：沖縄県医師会
- (10) お問い合わせ：琉球大学医学部附属病院地域医療部
TEL:098-895-1331（直通）

手を取り合おう。

持続可能な発展〈Sustainable Development〉をめざして

タイ発！ 地域医療再生の 処方箋

2010年3月2日(火) 2010年3月3日(水)
19:00~20:30 19:00~20:30
今帰仁村コミュニティーセンター 沖縄県医師会館2階 会議室1

Dr. Tantip Thamrongwarangoon
NPO 法人 持続可能な地域づくり 事業団代表・医師

Dr. Apisit Thamrongwarangoon
タイ・コンケン ウボンラット病院 院長

24年前にタイへ赴任し、孤軍奮闘の末、地域と力を合わせることで、病気を減らし豊かで健康な村をつくりあげたご夫妻です

対 象
保健医療・教育関係者、
地域医療に関心のある方

参加費
無 料

※講演は英語で行われますが、日本語の通訳があります。

